

論文審査の要旨
Summary of Dissertation Review

博士の専攻分野の名称 Degree	博士 (学術)	氏名 Author	ROKSANA BINTE REZWAN
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論文題目 Title of Dissertation	An Inquiry of Knowledge-Based Behavior in the Workplace		
論文審査担当者 Dissertation Committee Member	主査 Committee Chair 准教授 高橋 与志 印 Seal 審査委員 Committee 教授 市橋 勝 審査委員 Committee 准教授 高橋 新吾 審査委員 Committee 准教授 後藤 大策 審査委員 Committee 教授 築達 延征 (人間社会科学研究科)		
〔論文審査の要旨〕 Summary of Dissertation Review 組織における知識は、個人やグループの継続的な相互作用によって生み出される重要な戦略的資源になると考えられるが、他者への知識提供がコストを伴うなどの原因で知識共有の実現には困難が伴う。このため、知識の意図的な隠蔽を含めた知識ベース行動をもたらす要因についての研究が蓄積されてきた。本論文では、こうした先行研究における議論を踏まえて、従業員による知識共有や知識隠蔽といった知識に関わる行動が生じる過程や境界条件について論じている。 章別構成は以下の通りである。第1章で序論を述べた後、第2章では企業従業員を対象に、中国の観察データと米国の実験データを用いて分析し、知識ベースの人的資源管理手法と知識共有について正の関連及び効果を明らかにした。第3章では、ミャンマーの経営学修士コース院生の日誌調査で得られた観察データを階層的リニアモデルで分析した結果、時間的制約と知識共有及び隠蔽の間にいずれも正の関連が示された。第4章では米国の企業従業員を対象として知識隠蔽の説明要因についてコンジョイント分析を行い、対人関係要因が正の効果をもたらしたのに対して、職場環境要因については有意な結果が得られなかった。第5章では、知識隠蔽をもたらす先行要因に関する系統的文献レビューに基づき、感情を中核的な媒介要因とする概念モデルを構築した。第6章は結論である。 当該分野における貢献としては、実証研究と系統的文献レビューを通じて、知識ベース行動の先行要因を個人、仕事、組織といった包括的な観点から整理し、組織心理学的過程を明らかにしたことが挙げられる。 また本論文の主な内容の一部は、査読付き論文2篇(ともにESCI誌)として刊行済みである。他の主要な分析結果についても、査読付き論文として投稿準備を進めている。以上の審査の結果、審査委員一同は、本論文が著者に博士(学術)の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた。			